

更生施設

「被告人を有罪とし、更生処置の刑に処する。」

無味乾燥とした味気ない声で、抑揚もなく淡々と告げた裁判官の言葉が、今でも耳の奥で小さく木霊している。

——こんなお座なりな手続きで俺の一生が決められていい筈がない。

昨日、裁判所の小法廷で形ばかりの手続きとしての判決が下された俺は、早速刑を迅速に執行する為に、更生施設へと身柄を移されていた。

この様な形で前科者の烙印を押されてしまった事に、不透明な将来へ向けた一抹の不安と不満は残ったが、敢えて控訴はしなかった。

今やれっきとした違法行為になってしまった、『バーチャル・ドラッグ不法所持及び使用』の現行犯として、警察当局に摘発されてしまったのだから、これからどう足掻いても無罪を勝ち取れる可能性はない。

この国は『誰が見ても明白としか思えない有罪をも無罪に変えてしまう敏腕弁護士』のいるアメリカではないのだし、仮にそんな弁護士がいたとしても雇う金もない。

その上、『更生処置』と言えば主に軽犯罪の初犯者に対して課せられる刑罰で、極めて短期間で刑の執行が終了するのが最大の特色と言われていた。

それならば、勝ち目の見込めない裁判に延々と拘って、徒に勾留期間を長引かせるよりも、早々に罪を認めて黙々と更生処置の刑に服した方が遥かにマシだった。

それに、『受刑者更生法』とかいう法律の制定以後、犯罪受刑者の社会復帰が促進される法的支援も拡充され、社会復帰した元受刑者に対する云われ無き差別も減少していると聞く。

俺の知っている限りでは、受刑者が再び社会復帰する為の目に見えない障害は、以前に比べれば格段に減少しているといってたかった。

摘発の際に、愛用のPCとバーチャル・ドラッグ用の精神感應センサー一式も押収されてしまった為、それらはもう一度揃え直さなくてはなるまい。

仮にPCだけはいずれ返却されるとしても、ハードディスク内のバーチャル・ドラッグ関連ソフトは跡形もなく消去されているに違いない。

いざという時の為にリムーバブル・ディスクに残しておいたバックアップ・データも、きっと一緒に押収されてしまったのだろう。

バーチャル・ドラッグが非合法化されてからは、それらの入手は極めて困難な状況に陥っていたが、少々危ない橋を渡れば不可能という事はないのだ。

一刻も早く、再びバーチャル・ドラッグの使用環境を整える為には、まず塀の外に出なくては話にならない。

「入りなさい」

付き添いの刑務官に促されて、俺は鉄製の分厚い扉を潜って、その向こう側の部屋に足を踏み入れた。

その部屋は、さながら実験室と言った様相を呈していた。

四方を取り囲む塀に沿って、見るからに複雑な仕組みの、名前も良く分からない様々な実験機器やら、複数のコンピュータ端末が所狭しと詰め込まれている。

部屋の中には、少々仰々しい外観のリクライニング・シートが無造作に設置されていた。

美容室などに在りがちのシートと言え、それ程イメージは食い違ってないだろう。

そして、部屋には既に二人の男が、俺の到着を今や遅しと待ち受けていたと言った所だろうか。

一人は、先程まで俺に付き添っていた刑務官と同様の制服を着用した、やはりひと目で刑務官と分かる出で立ちだったが、もう一人は少々場違いと言う印象の、白衣を纏った医者が研究者と言った風情の、小奇麗だが冷酷な雰囲気を漂わせた男だった。

この二人が刑の執行を担当すると言う事なのだろうか？

「その椅子に腰掛けて下さい」

静かに告げる刑務官の言葉に促されるままに、俺は適度にクッションが効いて座り心地の良さそうなシートに腰掛けると、白衣の男が手にしたファイルにちらちらと目線を漂わせながら、おもむろに話し始めた。

「これから、法令に則って、君に対して執行される刑の内容について若干の説明をさせていただきます。ここへ移送されたと言う事は、既に君もこれから執行される刑の名前くらいは承知していると思うが？」

「……更生処置だとか……」

——下らない事前手続きはすっ飛ばして、さっさと更生処置とやらを終わらせて欲しい。

俺は、白衣の男に返答するのが面倒になってお座なりにそう応えると、白衣の男は瞬間的に眉根に深い皺を刻んだが、すぐに元通りのままの無表情を取り戻して先を続ける。

「君は、精神感应機器等取締法違反……つまりバーチャル・ドラッグ法違反で有罪判決を受けたそうだから、これから執行される刑の内容を端的に説明するには、こう表現するのが良いだろう。要は君に、これからバーチャル・ドラッグと類似の手法で意識の深層に直接働きかけて、二度と同様の犯罪を犯さない様に潜在意識に理解してもらう事になる」

更生処置がバーチャル・ドラッグと同じ？

俺は無言のまま怪訝な表情を返すと、白衣の男は相変わらず無表情のまま、説明の対象である俺の存在も全く意識していないと言った風に、淡々と予め定められた手順に則って手続きを進めていく。

「ああ、どうやら君には更生処置とバーチャル・ドラッグとの関連性が理解出来ない様だから、一応説明しておこう。そもそもバーチャル・ドラッグは更生処置の為に開発された精神感应技術の一部を、不当に誤った目的で悪用された派生物に過ぎない。かつてこの技術の開発に携わった技術者の一人が、無断で精神感应技術を盗用して、私的な娯楽目的で作り上げたのがバーチャル・ドラッグなのだ。その男はそれを個人の娯楽目的として使用するだけではなく、インターネットを通じて不特定多数の個人に対する無償配布までもを始めてしまった。そのお陰でバーチャル・ドラッグが深刻な社会問題となり、遂には対策法まで制

定して徹底的に取り締まらなくてはならなかったのだよ」

バーチャル・ドラッグがこの世界に誕生してから、既に三年くらいは経過したのだろうか。

確かに、更生処置が軽犯罪に対する効果的な刑罰として正式採用された前後にかけて、バーチャル・ドラッグの流通も秘密裡に始まった様な気がする。

当初は『バーチャル・エクスタシー』と題した PC 用のソフトウェアに、専用の精神感應センサーの製作手順を記したドキュメントが添付されているだけと言った、至極簡単なパッケージで無償配布されていた。

しかし、バーチャル・ドラッグがアンダーグラウンドな話題となるに従って、精神感應センサーを商品化する者が現れたり、あるいは別の人物が『バーチャル・エクスタシー』エクステンション・キットなるプラグイン・ソフトを開発した事から、世間のバーチャル・ドラッグブームは一気に過熱した。

『バーチャル・エクスタシー』は極めて常習性が高く、過度の使用によって肉体的な変調を来したり、通常の社会生活が送れなくなる人々が続出し、遂には『バーチャル・エクスタシー』の三昼夜連続使用による死者までが発生するに至って、深刻な社会問題として政府も対策に乗り出す事になる。

『バーチャル・ドラッグ』という悪名は、マスコミが挙って『バーチャル・エクスタシー』の危険性を社会問題として取り上げ始めた時に、インパクトのある俗称として用いられたのが最初だったが、いつの間にか俗称である『バーチャル・ドラッグ』という名称の方が定着してしまったのだ。

当局の対応は素早かった。

バーチャル・ドラッグの拡散が確認され、一方バーチャル・ドラッグが更生処置に関連する技術の盗用であると発覚した直後から、警察当局や一部国会議員の間でバーチャル・ドラッグ対策法の成立に向けた動きが起こっていた。

それが、マスコミ報道によって一気に深刻な社会問題として世間の注目を浴びるに至って、政府はすぐさま精神感應機器対策法なる、実質バーチャル・ドラッグ法を国会に上程し、与野党の賛成多数で可決成立、同法が施行されたのが半年程前の事だ。

以降、警察当局は『基本的にはどの PC もインターネット接続されている』と言う事実に着目し、半ば非合法ともいえそうなハッキング技術を応用した『バーチャル・ドラッグ追跡ソフト』まで導入して、バーチャル・ドラッグ摘発に躍起になった。

当局の徹底した取締りの甲斐あって、現在では表向きバーチャル・ドラッグは世間から姿を消した。

しかし、古今東西様々な常習性薬物が、幾度もどの様な手法で撲滅に向けた摘発が行なわれようと決してなくならなかった様に、バーチャル・ドラッグもその桁外れの常習性ゆえに、法的規制や取締りの強化だけではそう簡単に一掃出来る物ではない。

かくして、争いの場はアンダーグラウンドな世界へと移行して、尚バーチャル・ドラッグに嵌る常習者達や、彼らに対する非合法的取引の見返りに法外な収益を上げる犯罪組織と、

警察当局による際限のないイタチごっこが始まったのだ。

つまり、元々再犯防止に効果的と目されて鳴り物入りで導入された更生処置関連技術が、いつの間にか犯罪の温床と化していたのだから、多分開発にも携わったのであろう眼前の白衣の男にとっても、未だにバーチャル・ドラッグが世間に蔓延っている事を快く思っていないのだろう。

「……という訳で、バーチャル・ドラッグ蔓延の責任の一端は、残念ながら我々のセキュリティ対策の甘さにもあったと認めなくてはならない。それ故に、私達には、君が二度とバーチャル・ドラッグなどと言う下らない玩具にうつつを抜かす事なく、更生して再び立派な社会の一員となれる様に、最大限の処置を施す責務があるのだ」

ふと、白衣の男は『今初めて存在に気づいた』とでも言う様に、傍らの刑務官に向かって爬虫類の冷酷な視線を向けた。

「ところで、当局は本当にバーチャル・ドラッグ撲滅に全力を傾けているのかね？ 『精神感應機器対策法』違反の受刑者数も一向に減少する気配を見せない様だが……」

「もちろんです。摘発を強化しているからこそ、受刑者数も依然多数に上るのだとご理解頂きたいのです。バーチャル・ドラッグの蔓延がそれだけ深刻な状況にあったという証拠なのでしょう」

——こんな所で内輪揉めか……いい加減にさっさとやるべき事をやって俺を解放してくれ。

内心無然としつつ二人の会話を無言で聞き流していた俺から見ても、至極当然と思える刑務官の落ち着いた返答に、白衣の男は気に入らないのか、微かに鋭い視線を刑務官に投げてから、少々不満気に俺の方に向き直った。

「さて、我々もそう長々と君の雑談に付き合っている時間はないのだから、そろそろ結論に移らせてもらうが、最後に一つだけ了承していただきたい。この刑を執行するに当たって、君にとって最も効果的に作用させる為に、君の経歴から趣味趣向・思想信条に至るまでのありとあらゆる個人情報を収集させていただいた。これらの情報は、君にとって最適な更生プログラムを組み立てる為に役立てられた。尚、今回集められた情報は、更生処置技術の更なる向上に役立てる為に提供して頂く事になるが、それ以外の目的で使用される事はないと予め申し上げておく。もし、君が後日、この情報を不正使用されたとか、情報漏洩によって何らかの不利益を被った場合、所定の手続きに則って被害救済の訴えを起こす事が出来る。同様の内容は法務省ウェブサイトにも告示されているので、不明な点は後日該当箇所を確認頂きたい」

——雑談どころか、一人で勝手に捲し立てているだけの癖に、何と勝手な……。

俺が内心抱いている感情など全く感知しない……と言った調子で、白衣の男がシートに深く背を持たせ掛ける様促す言葉に従っていると、俺の頭の中に急速に白い霧が立ち込めて来て、少々不安を覚える唐突な眠気に襲われた。

薬物使用の影響にも似た不自然な眠気に半ば意識を鈍らされながら、俺は白衣の男が背後のPCの前に腰掛けて、何やら端末を操作している様子を呆然と眺めていた。

「君は今、急速な眠気に襲われている事と思う。しかし、案ずる事はない。これは既に更生処置の初期段階なのだから。これからこの機械が、君の深層意識に直接語りかける。その際に様々な幻覚に襲われる事と思うが、それは更生処置における正常な反応なのだ。そして、再び目覚めた時、君はそのままで、今までとは全くの別人に生まれ変わっている筈だ」

白衣の男がそういう終えた頃、俺は既に深い眠気にどっぷりと浸っていて、意識が完全に途切れる寸前の状態にあった。

＊

見渡す限りの一面が濃密な漆黒の闇に閉ざされ、俺の視覚は完全に奪われていた。

突如、背筋を冷ややかに駆け抜けた、言い知れぬ未知の不安感に突き動かされて、俺は慌てて自分の置かれた状況を把握しようと身動きする。

ふと、鼻先を甘く仄かに温かい吐息がサラリと掠め、次の瞬間、甘く滑らかな唇が俺の口元に優しく重ねられる。

まるで、それがきっかけとなって頭の中のスイッチが切り替わった様に、或いは、今まで首を長くして待ち焦がれていた瞬間を遂に迎えたと喜んでしゃぎ回る子供の様に、俺はしばらくの間、狂った様に彼女の弾力のある柔らかな唇をひたすら貪り続けた。

熱く滑らかな舌が俺の舌に絡みついてちろちろと舐り、仄かに甘く彼女の口内に滴る濃密な蜜の味を心行くまで味わい、焼ける程の喉の渴きを潤した。

そうして半ば呼吸も疎かに、一頻り彼女の唇の味を堪能していると、さすがに少し息苦しくなると、名残惜しい思いに後ろ髪を引かれながらも、甘い蜜に粘ついた口元を離す。

「ねえ、どうしたの？ 何だかいつもと少し違うみたい……」

クローディアが怪訝な表情を浮かべて問いかける。

「ああ、今まで何だか奇妙な夢を見ていた様なんだ。なぜか俺はバーチャル・ドラッグ使用の現行犯で警察に逮捕されて、幸いにも初犯だったんで刑は軽いんだけど、更生処置を受けさせられると言う夢だった」

「ふうん。何だかよくわからないけど、ちょっと嫌な夢ね」

「ああ。縁起でもない夢だったけど、でもそんな悪夢から目覚めさせてくれたのは、どうやら君らしいから、感謝しないとイケないな……」

そう言って、衝動的にクローディアの艶やかな肢体に腕を回してきつく抱き寄せると、クローディアはされるがままに俺の腕の中に包まれて、微かに上気した素肌を密着させていた。

そして、小悪魔の様な愛嬌のある笑みを零して、俺の耳元で小さく呟く。

「うふふ……。何はともあれ、あなたの役に立ててよかった。こんな事で良かったらいつでも言って。そんな不吉な夢は私が全て追いかけて忘れさせてあげるから」

「ああ、ありがとう」

自然と漏れた俺の言葉に反応して、闇の中にあって一際白く、眩しく輝いて見えるクロー

ディアの適度に引き締まった裸身が、俺の視界を左右に行き交って妖しく蠢いていた。

そして、ベッドに横たわったままの俺の体に折り重なって、再び唇を求めてくると、俺も頭の中身をトロトロに蕩けさせて、何もかもを忘れさせる魔力を孕んだ、クローディアの甘い唇の香りに吸い寄せられて、しばしの間、滑らかな舌と舌を絡ませつつ蕩ける蜜の交歓に酔い痴れていた。

実際の所、クローディアは“いい女”だ。

それは当然と言えば余りに当然で、今更敢えて強調する必要もない厳然とした事実なのだが、クローディアこそが俺にとっては理想の女性なのだ。

クローディアは、女性に対する俺の非現実的な願望と、バーチャル・ドラッグの精神感應技術の成果が結集した、いわば俺の好みに合わせて作り上げた朧な幻だった。

しかし、バーチャル・ドラッグは通常の夢幻と違って、俺が望む限り何度でも、理想の女性との甘いひと時の体験を、俺が望む限りのあらゆるシチュエーションで、現実の体験よりも一層のリアリティを沿えて再現してくれるのだから、これ程素晴らしいシステムはないと思う。

バーチャル・ドラッグ……正式名称で言うと『バーチャル・エクスタシー』だが……には、標準で白人風、黒人風、東洋人風の三種類のバーチャル・フィギュアが用意されていて、様々な設定値を変更する事によって、それらのハーフを作り上げたり、自分の好みの外見を持ったフィギュアに加工する事が出来るのだ。

まず、フィギュアの外見に関する設定を終えたと、次にフィギュアの基本的な性格付けに関する設定を行なう事も可能だ。

デフォルト設定のままであれば、受身主体の性格付けが行なわれるが、むしろバーチャル・フィギュアにリードされたいというのであれば、積極的な性格に設定を変更すればよい。

といっても、これは基本的な性格設定であって、実際にバーチャル・フィギュアとのコミュニケーションを繰り返す度に、バーチャル・ドラッグの方で使用者の反応を常にリサーチしながら、適宜、最も使用者との相性が合致する様に細かなチューニングが繰り返されるという、使用者に優しい親切設計でもある。

予めその様な細かな配慮が随所で施されているからこそ、バーチャル・ドラッグの作り上げた理想のバーチャル・フィギュア達は、常に使用者を飽きさせずに惹きつけて止まない、究極の彼女になり得るのだろう。

それは外部から見れば、実体のないつかの間の朧な夢幻に過ぎなかったが、人が自分以外の存在や様々な現象を知覚するのは、最終的には脳である以上、その対象が実体であるかどうかは大した問題ではない。

例え他人には実体のない夢幻であっても、自分自身の脳がその夢幻を、実体よりも尚一層リアリティを伴った存在として認識していたら、それは知覚した本人にとっては夢幻ではなく、現実味を帯びた実体そのものに相違ないのだ。

まさに、バーチャル・ドラッグは、現実と夢幻の間に人の脳が引き起こす錯覚を巧みに利用した、人類史上における画期的な進歩の証ともいえた。

時代を経るに従って様々な社会の変革を迫られ、それに伴って人と人との繋がりが益々希薄になってゆき、他人とのコミュニケーションを図りたいと幾ら望んでも上手く行かずに、時として厄介なトラブルに巻き込まれがちな、少々不器用で晩熟な男達にとって、手軽に好みの女性との快いコミュニケーションが楽しめるツールが、このバーチャル・ドラッグだった。

しかし反面、現実と見紛う程のリアリティの再現性こそが、使用者の常習性を過度にエスカレートさせ、正常な社会生活を送れなくなるケースも頻発して、深刻な社会問題となった為、遂にはその所持と使用が法的規制を受ける羽目に陥ってしまった。

だが、幾ら正常な社会生活を送るに当たっては害悪になるからといって、法的な規制を設けて使用者から強引にバーチャル・ドラッグを取り上げようとしても、使用者の側もそう簡単にバーチャル・ドラッグを手放す筈がない。

むしろ、バーチャル・ドラッグを規制する側のいう、『正常な社会生活』の実態こそが既に病んでいて、実質的にはどこかが醜く捻じ曲がって腐食しているにも関わらず、『正常な社会生活』と根拠もなく強弁されている現実の方が遥かに悲惨であり、バーチャル・ドラッグを求める者は、『現実』という名の容赦ない暴力の応酬に深く傷ついて、瀕死の重傷を負った体を癒す為に、束の間の休息を求めたに過ぎない。

この世の中には、俺の酷く疲れ、深く傷ついた心を癒してくれる者は何もなかった。

しかし、バーチャル・ドラッグという、俺にとってのもう一つの現実世界には、クローディアという名の、俺の心を癒し、労わり、新たな活力を与えてくれる存在があった。

せっかく見つけたクローディアとの心休まるひと時を、幾ら法律やなんだを振り翳して取り上げようとしても、どこの誰にも邪魔させるものか。

そう考えると、俺は先程まで何と不吉な夢を見ていたのだろうか。

あろう事か、バーチャル・ドラッグ法違反で摘発されて、もう二度とクローディアと再会出来なくなるかもしれない瀬戸際に立たされてしまったのだから。

しかし同時に、それが単なる他愛もない夢の断片に過ぎなかったと分かっただけでも、心底からの安堵の為に、不意に体の力が抜けて、腰が砕けたままその場にへたり込んでしまいそうになる。

きっと、この所寝不足気味の日々が続いていたので、束の間のバーチャル・ドラッグでクローディアとの心休まる時間を過ごしていた最中に、不覚にも怒涛となって迫り来る眠気に飲み込まれてしまったのだろう。

さすがにバーチャル・ドラッグといえども、使用者の睡眠中の夢にまで直接干渉する能力は持っていないらしい。

しかし、夢の内容がバーチャル・ドラッグとは無関係とも言い難い側面もあったので、きっと普段から気に掛けていた、『バーチャル・ドラッグ法違反でいつか当局に摘発されるのではないか？』という、漠然とした不安感に苛まれていた心理状態が、奇妙な悪夢を呼び覚ますきっかけになったのだろうか。

反面、あってはならない最悪の事態から救い出して正気を取り戻させてくれたのも、言い

知れぬ不安感の元凶であり、かつ悪夢の引き金となったであろうバーチャル・ドラッグが作り出した、俺だけの永遠のアイドル……クローディアだった。

確かに、バーチャル・ドラッグとの付き合いが俺にとっての不安の元凶ではあったが、同時にクローディアはどこまでも優しく、温かく、艶やかで、肌理細やかで、どこまでも俺を夢中にさせて手放さない。

俺は衝動的に腕を伸ばして、それまで俺の上で甲斐甲斐しく動き回っていた健気なクローディアの体をきつく抱き寄せると、俺のそれ程遅しくはない胸板に押し付けられた、内側を流れる血液の赤みまでが灰かに透ける程薄く細やかな白い肌を通して、生命の存在を明確に証明する微かな温もりと、軽やかなリズムを刻む心臓の鼓動が伝わってくる。

俺はそのままクローディアの背中に腕を回して、滑らかかつ肌理細やかな素肌の感触を指先で弄んでいた。

クローディアは、そのまましばらくじっと息を潜めたまま俺のしたい様にさせてくれた。

そして、頃合いを見計らって、相変わらず仰向けに横たわったままの俺の傍らに静かに手を突いて、互いの顔が直視しやすい程度の間合いを取った。

「本当になんか今日はヘンね。さっき言っていた奇妙な夢の事を、まだ気にしているんだ……」

「あ、すまない。余計な事を考えていて……」

「ううん。人には、誰にだって、どうしても気になって頭から離れない心配事や悩み事があるものだし。でも、本当はそれを早く忘れたいのでしょう？」

「まあ、な」

「わかった。そうしたら、今日は何もかもを忘れて夢中になってしまうくらい激しくしてあげる。きっと、そうすれば嫌な事なんて全て綺麗サッパリ忘れられるでしょ？」

薄闇の中に、クローディアの白い笑顔が浮かんだ。

これまでは、どちらかというと清楚で大人しいイメージの先行していたクローディアが、今日は何だかとても艶めかしく妖艶な大人の女の雰囲気の色濃く漂わせている。

それに、まるで人が変わった様に積極的にこの場をリードしている。

尤も、これまではどちらかという『自分の好きな様に扱いたい』という俺の我儘を素直に受け入れて、自由にやりたい様にさせてくれていたという所が本当なのだろうか。

更に、俺自身よりも遥かに俺の体の微かな感覚を心得ているといった風に、クローディアは俺の体の芯からじわじわと込み上げる快感を呼び覚ます為に、絶妙の効果が現れるポイントを刺激する。

寄せては返す波のうねりの様に、時に激しく、時には密かに穏やかに、適度に特定のポイントを集中的に刺激して、俺の関心をクローディアが与える心地好い刺激のみに向かわせる。

これまでは『自分自身がクローディアに愛撫される』という経験がなかったから、尚の事、クローディアの意外な一面に改めて驚かされ、再び新たな魅力を感じていた。

元々、クローディア自身がバーチャル・ドラッグと俺の非現実的な妄想の複雑に融合し

た産物なのだから、自分の思うが侘のどの様なタイプの性格に改める事も可能ではある。

しかし、一度バーチャル・フィギュアとの関係が落ち着いて、ある程度長続きしてしまうと、余り細かな変更などは行なわないものだ。

途中から手を加えると、これまでに確定されてきたフィギュアの性格のバランス自体を損なってしまって、予想外の変更が加えられる可能性があったから、いっその事フィギュアの設定そのものを一からやり直した方が良い位だ。

フィギュアの設定を一からやり直すという事は、俺がこれまでにクローディアとの間に築いてきた様々な精神的な繋がりも断ち切られて、名実共にクローディアはこの世界から永久に消え去ってしまう事になる。

バーチャル・フィギュアの設定に途中から手を加えるのは、それ程危険な行為なのだから、例えこれまで表面化されていなかったとしても、クローディアが見せた意外な一面は、実は元々から備わっていた能力であり、性格的な側面なのだろう。

——もしかしたら、どこぞのアンドロイドの名前なんかを借用したからだろうか？

『クローディア』という名前の由来は、以前どこかで読んだ記憶がある小説に登場する、とても魅力的な女性の外観を持ったアンドロイドの名をそのまま拝借したものだった。

だから、その小説のキャラクターの特性が、俺の記憶を通じて微妙に現れた結果なのだろうか？

でも、それは眼前のバーチャル・フィギュアのクローディアにとっては決してマイナスではなく、むしろこれまでとは違った新たな魅力を垣間見せて、更なるクローディアへの関心と愛着を強める結果へと繋がっていった。

「ねえ、そろそろ、したい？」

クローディアの少々はにかんだ問いかけに無言で頷くと、今日は始めて目の当たりにしたクローディアの新たな魅力を心行くまで堪能する為、全てをクローディアに委ねる事にした。

俺は、クローディアの体の芯から立ち昇る熱い火照りに包まれながら、甘く濃密に貼りつく海の底深くへと、静かに沈んでいった。

——ああ。

思わず心地好い感嘆の声が口をついて出そうになった矢先に、俺は突然襲い掛かった身を引き千切られる激痛に身悶え、言葉にならない悲鳴を喉の奥から迸らせながら跳ね起きた。

＊

痛！

俺は突如局部を襲った耐え難い激痛に驚き、情けなくも女々しい叫び声を漏らしつつ、身を引き千切る激痛が襲った部分に手をあてがったまま、よろよろとよろめきながら起き上がった。

しかし、幸いにも意識が戻った途端に、玉の脂汗が迸る程の激痛が嘘の様になりを潜めてしまった。

——全く、冗談じゃない！

如何にも男が陥りやすそうな盲点を突いて陥れるとは、あっさりと引っ掛かった俺も馬鹿だったのだろうが、大切な男の象徴を引き千切るなんて、冗談にしても度が過ぎている。

しかも、あの夢の中でペテンに嵌めようとしたのが、これまでただ一人心の底から信頼出来る相手だと安心し切っていたクロード・ディアだなんて……。

ともあれ、あの感覚が間違いなく夢に過ぎないという事は、今こうして五体満足にいる自分自身を再確認している時点で余りに明白だが、何かこの先に待ち構える出来事の手触れを思わせる様な、余りに不吉で不気味な夢だった。

「クソッ！ お陰でこんなに汗ばんじゃったじゃないか……」

俺は、今し方の強烈な体験が現実ではないと気付いて、安堵の余り愚にもつかない悪態をぼそぼそと口籠りつつ、額に溜まった脂汗を手の甲で乱雑に拭う。

上半身を覆っているＴシャツが玉の汗を吸って肌にへばり付き、見る間に蒸散して体温を奪って、冷たくベト付く生理的不快感に耐えかねていた。

早くシャワーを浴びて、この耐え難い不快感を嫌な記憶共々洗い流して、全てを綺麗サッパリ意識の遥か彼方へ押し流してしまいたい。

窓ガラス越しに、街灯の微かな灯りが差し込む薄暗い室内を、日頃から使い慣れた勝手知ったる記憶と勘に頼って、部屋の灯りも点けずにゴソゴソと手探りで着替えを漁りつつ、俺の意識は一足早くシャワールームに飛んでいた。

シャワーの生温い水飛沫が頭から俺の全身を小気味よく叩いて、素肌にベト付くヌルヌルとした脂交じりの嫌な感覚を洗い流してくれる。

そのまま、心行くまで勢い良く弾け飛ぶ水飛沫の中に身をおいて、嫌な汗の感覚が粗方拭い去られた頃、やっと安堵の溜息を漏らしてシャワールームを後にする。

——コツコツ。

脱衣場に準備してあったバスタオルに手を伸ばし、止め処なく滴り落ちる水飛沫を拭い取っていると、微かに玄関の扉をノックする音が耳元に響いてくる。

「……ったく、こんな夜遅くに、一体何なんだ？」

慌てて全身の水飛沫を拭い落とし、下着を身に着けて髪の毛の雫をざっと拭っている間にも、繰り返し玄関をノックする音は激しさを増している。

「そんなにドカドカと殴りつけるなって……少しは近所迷惑も考えたらどうなんだ……」

執拗なまでに乱暴に扉を叩き続ける未知の来訪者に、俺は微かな不安と不信感を抱いたが、とりあえず対応に出て見るまでは結論を出す訳には行かない。

何か途轍もなく重要な用件があって、敢えて非常識な行為に及んでも俺に直面する必要のある人物の来訪かもしれないし、その用件は正に一刻を争う類いのものかもしれない。

或いは、俺が未だに日々愛用しているバーチャル・ドラッグの存在が、何らかの形で警察当局に発覚したのかもしれない。

だとしたら、一体どうすればいいのだろうか？

とにかく、まずはこんな真夜中に近所迷惑も考えずに扉が破れる程激しく叩き続けて、俺をこの部屋から引き摺り出したがっている奴の正体を見極めなくては、何とも判断のしようがない。

警察の手入れだったら逃げるしかないし、それ以外の用件ならば内容を確認しない限り、その先の対応を想定する術はない。

——いっその事、居留守を使うべきか？

この物騒なご時勢だ。

身元の知らない怪しい来訪者の対応は極力控えるというのも、特に一人住まいの女性であれば、自分の身を守る為の立派な処世術と言えるだろう。

——しかし。

ふと、俺は思う所があって、取り敢えず来訪者の正体くらいは確かめようと、扉の向こう側にこちらの動きを気取られない様に息を潜め、細心の注意を払って摺り足で玄関へ繋がる廊下に出た。

——パンッ！

その刹那、爆竹が鳴り響く様な乾いた破裂音が扉越しに鳴り響いた。

——何だ？

一般庶民の平穏な日常生活においては、滅多に耳にする機会はない筈の音の正体に疑問を抱きつつ、反面余り認めたくない答えが既に頭の中に思い浮かんでいた。

——まさかとは思うが、銃声か？

俺には、余り歓迎したくない自らの予測の結果を確認する勇気は湧かなかった。

夜中に突如、他人の家の扉を殴り壊さん程に叩き続け、かと思えば、いきなり他人の家の玄関越しに銃を乱射する正体不明の来訪者に、敢えて命の危険を冒してまで面会する理由が思い当たらない。

日常的に銃を携帯しているとすれば、警察官か闇社会の住人くらいしか思い当たらなかったが、警察官がいきなり人の家の玄関口で発砲するという非常識極まりない話を、未だ聞いた事はなかった。

残された可能性は、人の迷惑も顧みずに、どのような手段を講じてでも、自らの目的を平然と成し遂げるであろう、法も秩序も全く省みる可能性のないあいつらに違いない。

闇社会から送り込まれた暗殺者。

でも、俺に対してなぜ闇社会から追跡の手が伸びるのか、全く思い当たる節がなかった。

しかし、今はその様な事を悠長に考えている余裕はない。

一刻も早く扉越しの暗殺者から身を潜めなくては、情け容赦なく問答無用で、呆気なく彼の世へ送られてしまうのだ。

俺は慌てて廊下を引き返して、部屋の窓越しに据え付けられているベランダに飛び出し、とにかくこの部屋から抜け出せる手段はないかと頭を巡らせた。

階下の石畳に覆われた路地までかなりの高さがあったが、飛び降りられない高さではな

い。

ここは建物の二階とはいえ、今無理をして飛び降りても、脚を挫いたり骨折を負ってしまったら、それこそ逃げる逃げないの問題ではなくなってしまう。

呆気なく暗殺者に捕らえられて、意のままに扱われてしまうだろう。

かといって、いつまでも対応を決めかねて、グズグズと徒に時間を浪費しては、すぐにも暗殺者の毒牙に掛かってしまう。

俺は意を決してベランダの鉄柵を跨いで乗り越え、階下で街灯の灯りを受けて鈍い反射光を放つ石畳に向かって、思い切って飛び降りた。

——ピシャ！

何とか着地には成功したものの、何も覆う物のない素足が鈍く光る石畳をまともに叩き、踵から膝へと突き抜ける激しい衝撃が、背骨を抜けて頭蓋骨の中身までも振動させる。

次いで、足の裏にジワリと皮膚を突き刺す様な痛みと、熱く血液が煮え滾る感覚が襲ってくる。

痛！

膝がガクガクとガタついて力が入らなかったが、痛みが癒えて元の感覚に戻るのを悠長に待ってられる程、闇社会の暗殺者は甘くも、お人よしでも、間抜けでもあるまい。

じわじわと脚から全身へ広がる苦痛に、顔を歪めて頭上を仰ぐ俺の視界に、見知らぬ男の無表情な冷たい視線が飛び込んでくる。

あろう事か、俺がベランダから飛び降りるべきか悩んでいる僅かな時間に、暗殺者はあっさり部屋の扉を破壊して、俺の部屋に土足で侵入していたのだ。

やはり思い切って飛び降りた判断は正解だった……というより、もう少し決断が遅れていれば、呆気なく暗殺者に捕獲されていたのかもしれない。

男が頭上のベランダから俺に向かって銃を構える姿を尻目に、俺は慌てて建物の隙間の路地に身を隠した。

それからは一度も背後を振り返りもせず、唯訳も分からずに、後ろからひたひたと迫る暗殺者の追跡を手を逃れるのに必死だった。

今どこを走っているのかも良く分からない俺の耳元に、良く聞き取れないが何事かを叫んでいる男の声が微かに響き、続いてコツコツと石畳を叩く複数の金属音が、路地を囲む石畳やレンガの壁に共鳴していた。

——追手は一人ではないのか？

耳元に微かに届く靴音だけでも、おそらく四～五人の追手が迫っていそうな気がする。

俺は、時折街灯がポツンと孤独に立ち尽くしているだけの、薄闇と静寂に包まれた生命の気配の感じられない石畳の上を、パタパタと裸足の情けない音を響かせながら、なるべく追手の靴音が響く方角の反対側へと駆けていった。

路地は細く入り組んでいて、どこまでも似た様な光景が続いていた。

土地勘がなくては容易に道に迷い込んでしまいそうだったが、もう何年も住んで、良く知っている町並みだと思っていた自分の認識が誤りで、既にどこをどう走っているのか見当

もつかなくなる程、この町の地理に関する知識も関心も全くなかった事に、今更ながら気付かされた。

きっと、この町に移り住んでからと言うものの、バーチャル・ドラッグなどにうつつを抜かして、殆どの時間を自分の部屋に入り浸るか、外に出ても近くのコンビニとの往復くらいしかしていなかったから、一応この町にしばらく住んではいても、この町の事など何一つ知らなかったし興味もなかった。

特に、表通りならまだしも、複雑怪奇に入り組んだ裏路地に誤って迷い込もうものなら、例え追手の目を逃れるにはちょうど良いとしても、当の自分自身も道に迷って途方に暮れてしまう。

今更後悔した所で、急に町の様子が手に取る様に理解出来る訳ではないし、親切な善意の道案内が現れて、俺が追手の目を逃れる最も確実で安心なルートを案内してくれる訳でも、その後俺の部屋まで無事に送り届けてくれる訳でもない。

そんな後々の些細な心配事に気を取られている暇はない。

今は暗殺者の手を振り切って、無事に生き長らえる事が最優先されなくてはならないのだ。

俺は、追手の追跡を遅らせる為に、ワザと細い路地を左右に曲がりながら駆け続けていた。

追手の大まかな位置取りは、石畳に響く靴音からある程度察する事が出来たが、敵はどうやら二手に分かれて俺を囲い込む作戦に出たらしい。

コツコツと石畳を蹴る追手の靴音程には目立たないものの、俺の素足が石畳を叩く時のパタパタと響く足音も、きっと追手の耳に届いているだろうから、こちらの位置もある程度把握されているのだろう。

それならば、極力足音を立てずに静かに歩けばやり過ごせそうな気もするが、敵は多分この様なケースを幾度も経験している追跡のプロで、しかも複数いるのだ。

きっと足音が消えた辺りを中心に虱潰しに探索され、何れ捕捉されるのを、迫る奴らの靴音に怯えながら息を潜めて隠れているのは、精神的に耐えられそうになかった。

たとえ相手方にこちらの居場所がある程度伝わってしまうとしても、少しでも追手から遠く離れた方が、まだしも精神的には多少落ち着ける。

——そこを左だ。

ふと閃いた直感に従って、俺が曲がった先の路地は、そのまま行く手に交差する路地もなく、一直線に闇の奥へと続いている。

何となく不吉な予感が頭を過ぎったが、一度入ってしまった道に戻っては、追手に捕捉されてしまうリスクが増すばかりで得る所はないと、一か八かの直感を信じて路地を進んでいった。

程なく、目の前に道を遮るレンガ造りの壁が出現し、俺の行く手は完全に閉ざされてしまった。

先程ならば、まだ掴まるリスクを取って引き返す選択も出来たが、ここまで来てしまっただけでもリスクが高過ぎるし、目の前の壁を乗り越えるのは、何の道具も持たない疲れ切っ

た俺には不可能だった。

路地の両脇に立ち並ぶ建物に潜り込む……と言う選択肢も考えられなくはなかったが、それも目の前の壁を乗り越えるのと同じ位、可能性は見込めないだろう。

昼間ならばまだしも、真夜中のこの時間に訪問する者などある筈がないし、元々の治安の悪さもあって、幾ら俺が助けを求めようと、求めに応じて家に引き入れてくれる奇特な者がいるとも思えない。

誰もが、余計なトラブルに好き好んで巻き込まれたいとは思えない。

しかし、こうして呆然となす術もなく立ち往生している間にも、追手の靴音は間近に迫っている。

——何か方法はないのか？

四方を振り向いて逃走の手段を模索する俺の視界に、マンホールの金属製の分厚い蓋が、石畳に紛れて路上で鈍く光っている様子が飛び込んできた。

このマンホールは、町の下水道として使用されている筈だった。

生まれてこの方、町の下水道に足を踏み入れた記憶はなかったが、他に逃げ道がないというだけでなく、例え一時的であっても追手の眼を晦ますには格好の逃げ道かもしれない。

少々汚くて不快な臭いで充満していようが、この際自分の命を天秤に掛ければ我慢出来ないものでもない。

俺は意を決して、すぐさまマンホールの縦穴に重く押し掛かる金属製の蓋に手を掛けた。

背後に響く靴音は、既に追手の足音がかなり近辺に迫っている事を示していたが、ここで焦ってマンホールの蓋の金属音を響かせてしまえば、徒にこちらから自分の居場所を暴露してしまうばかりでなく、こちらの意図すら教えてしまいかねない。

とにかく慎重に、落ち着いて……それだけを一身に念じながら、ゆっくりと細心の注意を払って蓋を持ち上げ、何とか一人が擦り抜けられる程度の隙間を空けると、その先に真っ直ぐに伸びる暗黒の縦穴の壁面に埋め込まれた足場を確認しながら、一步ずつ静かに体を沈めていった。

そして全身が穴の中にすっぽりと納まると、再び細心の注意を払って、一旦ずらしたマンホールの蓋を元へ戻していった。

思わず息を止めてしまう位、微かな金属音も漏らさぬ様に慎重の上にも慎重を期して、やがて屋外の街路灯から差し込む僅かな明かりも完全に遮断されてしまうと、俺はその場で思わず安堵の余り、下から立ち込める異臭も忘れて深い溜息を漏らしていた。

*

墨汁をぶちまけてしまった様な濃密な闇が一面を覆う中、細い通路の側壁に沿って手探りで下水道を進んでいた。

足を一步繰り出す度に、ピチャピチャと音を立てて跳ね返る水音は気になったが、土踏ますが浸る程度のごく浅い水の流れがある以上、足音を立てずに歩みを進める事は不可能だ

った。

かといって、足音が響く事を気にしてその場に留まっていたは、今は屋外を徘徊している筈の暗殺者達も、やがて俺の意図に気づいてこの下水道にまで探索の手を広げるかもしれない。

その時が来る可能性を想定して、今のうちにあの路地の突き当りから出来る限り遠くへ離れておきたかった。

反面、幾ら闇社会から差し向けられた暗殺者が、その執拗なまでの粘り強さでどこまでも標的を追い詰める能力には定評があったとしても、この世の様々な汚物を掻き集めて押し流した最後の溜まり場であるこの下水道にまで入り込む筈がないと、半ば高を括った部分も無くはなかった。

だからこそ、例え視覚と嗅覚が損なわれる劣悪な環境であっても、敢えて少しでも穴の奥へ進んでいく必要があったし、そうする事こそが自分自身が生き長らえる最後の手段だと、何の根拠も無くただ漠然と思い込んでいた。

それにしても、幾らこのマンホールに入り込む時点で覚悟していたとはいえ、強烈に鼻の奥を刺激する、トイレの臭いを千倍に濃縮してから十年間熟成したと言う表現でも控えめに感じる、嗅覚の汚染公害に相応しい異臭が身体中に纏わりついて離れない。

人間の嗅覚は鼻の奥にある嗅覚細胞だけでしか感じない筈なのに、目蓋の奥がチクチクと刺す様な痛みに襲われて涙が滲んで来たり、それこそ身体中のあらゆる穴と言う穴から異臭のエキスが体内へ潜り込んで、体組織の内側から全身をじわじわと蝕もうとしている様にも感じられる。

毛穴の一つ一つまでもを強引に抉じ開けられて、内部に異物が侵入する様な、強烈な違和感・嫌悪感の高まりに、思わず立ち止まって胃の内容物を構わずぶちまけそうになってしまう。

しかし、胃の内容物は既にあらかた消化された後で、強烈な酸味を帯びた体液が、僅かに食道を競り上がって来るばかりだ。

更には、歩みを進める度に足の裏にこびり付く、ヌルヌルとした粘性を帯びた奇妙な固着物の、背筋にザワザワと怖気を生じさせるに十分な触感にも耐え難かった。

少しでも気を抜けば、忽ち足を掬われて扱けてしまいそうな、湯垢が長年に渡って蓄積した様なヌラッとした独特の不快感は、強いてあげれば、遥か昔に流行った PC の RPG ゲームに登場する、赤・青・緑・黄・紫など、あらゆるけばけばしい原色に染まったゲル状のモンスター『スライム』の巣に、意図せず足を突っ込んでしまった感覚といった表現が一番近いのだろうか。

せっかく、先程身体中に纏わりついた脂汗の不快感を、シャワーで洗い流して気分が落ち着いたばかりだというのに、今度は脂汗など遥かに及びもよらない程、強烈な不快感・嫌悪感を掻き立てる澱んだ液体や、二目と見る気が起きないだろう異様な沈殿物に取り囲まれているのだ。

視界を奪われている為に、少しでも周囲の状況を把握するべく、脇の壁に沿わせたままの

掌にも、今は乾燥してザラついているとはいえ、かつて湿気を帯びていた時には、やはり不快感に背筋が凍ってしまう程のぬめりを帯びていただろう物質の哀れな残骸が、意識せずともいつの間にかこびり付いてくる。

それらの、一度言い始めたら到底放置しておけない様々な不満や、居た堪れない数々の条件はあったとしても、視界が完全に奪われている状態は、むしろ今の自分にとっては有利に作用しているのだろうか。

仮にもしこの状態で更に視界が通じていたとしたら、未だかつてほんの微かな輪郭でさえも垣間見た記憶が無く、一瞬でも正視に耐えかねるこの世の存在とはにわかに考えられぬ無数の異様を目の当たりにして、込み上げる生理的不快感に精神をズタズタに破壊されたまま、もう一歩も前には進めない……といった状況に陥っていたかもしれない。

逆に、今は闇に閉ざされてまともに視界が利かないからこそ、実際にはありもしないこの世の全ての醜い物、おぞましい物が不恰好に寄り集まって出来た怪物の幻を妄想して、意味無く怯えているだけなのかもしれない。

しかし、それを言うならば、そもそも俺がこの様な小さく狭く汚らしい穴蔵へ迷い込むきっかけになったのは、訳の分からない闇社会から差し向けられた暗殺者の襲撃にあったし、そもそも俺が闇社会から付け狙われる理由が思いつかなかった。

その上、町はそろそろ寝静まろうかという刻限になってから、下着とTシャツだけを辛うじて身に纏っただけの、とても外出には適さない格好のまま、いつの間にか追い立てられる様に溝鼠よろしく下水道に這い蹲っている。

——何で俺だけがこんな目に遭わなくちゃならないんだ。

自分自身が何か思い当たる様な悪事を犯したとか、不意のトラブルに巻き込まれる前兆があったという訳ではないのに、最も望ましくない悪しき状況がわざわざ俺を選んで襲い掛かって来る様な錯覚さえ覚えてしまう。

否、不吉な前兆はあった。

嫌な夢というか、妄想と言うか、幻覚のようなものに襲われたのだった。

しかし、今はこの状況を脱する為には何の足しにもならない愚痴や恨み言を並べ立てて、ひと時の憂さ晴らしで満足出来る状況ではなかったし、そんな事を考えている余裕があったら、今頃俺が下水道に紛れ込んだ事に気付いたかもしれない追手から、出来る限り遠ざかる方が先決だった。

「とにかく、今は前に進む事だけに意識を集中しよう」

俺は一旦立ち止まり、先も後ろも見えぬ状況に、いつの間にか苛立ちを募らせていた意識を落ち着かせようと、自分に言い聞かせるように小さく囁くと、再び口を噤んで足を踏み出した。

その刹那、俺は突然背後から襲い掛かる強烈な圧力に、抗する術もなく押し倒された。

——何だ！

慌てて手を突こうと腕を前に伸ばしたが、最早転倒するといった単純な問題でない事は明らかだった。

俺は、下水道に突如流れ込んだ大量の濁流に巻き込まれ、その勢いに倒されたまま押し流されてしまったのだ。

瞬く間に激変する状況の変化に対応し切れずに、慌ててパニック状態に陥ってしまった俺の脳裏に、猛烈な濁流に押し流される自分の姿がフラッシュバックした時、既に俺には為す術もなく、ただ生じてしまった状況に身を任せて、ひたすら濁流に流されながら今後の成り行きを見守るくらいしか、やるべき事は残されていないと知った。

この世の全ての汚物を掻き集めた汚水の中に浸ったまま、俺の中で永遠と思える一瞬が過ぎ去った。

——駄目だ……もう息が続かない……。

自分が急流に流されている状況は、全身に受ける水の圧力や、急速にどこかへ向かって動いているという平衡感覚の変化から想像はついたが、そのまま自分には何もなす術がないとは言っても、このままの状態に置かれ続ける事には既に限界に達していた。

俺は特別な訓練を受けた強靱な肉体を持つ海猿ではないのだし、むしろどちらかと言えば体力には自信の無い方なのだから。

——このままでは窒息する。

とうとう我慢し切れずに頭を持ち上げると、そこには見渡す限りの広い空間があった。

目の前にあるのは、相変わらず一面に墨を塗りたくった様な、濃密な闇の世界である事に変わりは無かったが、そこは既に狭苦しくて不快な臭いの凝縮された下水道ではなかった。

足が地面に付く気配など微塵も感じさせない、途轍もない水深の深さを思わせた。

つい今し方まで、狭苦しい下水道の中で行き場を失って、猛り狂っていた濁流の勢いも失せ、それらの水もこの巨大な水溜りに全て飲み込まれてしまったという風に、心地好い静寂に包まれていた。

「ここは？」

余りに急激かつ唐突な状況の変化に、俺は思わず見えもしない周囲に目を凝らすが、そこがどこかの大洋上である……という事だけは、不意に口の中に飛び込んで来たさざ波の水の味ですぐに理解出来た。

微妙に塩分が混ざった、海水独特の味がする。

ふと、俺の肩先に、波間を漂う固い物体が軽く当たり、反射的にそれに手を伸ばしていた。

掌で触った感じでは、しばらくの間波間を漂っていたであろう丸太……といった印象であった。

ここまでは、なぜ自分にばかり望ましくない事態が起こるのだと、何とはなしに恨みがましい思いも抱いたが、何が何だか訳が分からないうちに海に放り出された矢先に丸太が漂っているとは、ちょっと出来過ぎた偶然というにも余りに不自然な幸運であろう。

俺は丸太らしき物体にしがみ付いてホッと一息つくと、これまでの理解不能な様々な凶事の連鎖に思いを馳せ、ようやく自分の置かれた状況を冷静に振り返る時間が出来た様に感じた。

それにしても、つい今し方まで街中の地下を流れる下水道で、濁流に飲まれてすぐにも溺

れ死んでしまいそうな状況に追い込まれていたのに、次に顔を上げたらどことも知れない大海原のど真ん中で波に揺られているとは、一体この状況の変化をどう説明したらいいのだろうか。

確かに、下水道から直接海に汚水が流れ着いたと考えられなくは無かったが、それならば辺りに町の喧騒が聞こえたり、町から発せられる灯りが見えても良さそうなものののに、少しでも陸地の近くにいらしき気配は感じられなかった。

しかし、それなら俺はどうやってここに流れ着いたのだろうか？

ほんの一瞬、濁流に流されていただけだというのに。

今現在の状況について言えば、幸いにも波間を漂っていた丸太らしき物体を捕まえられたお陰で、今すぐに溺死してしまうとか、その他の身の危険に晒される可能性はないと思われる。

遙か海の彼方に逃げおおせた事で、闇社会の暗殺者達の手は完全に逃れたとあってよし、下水道の耐えかねる臭気や汚水に悩まされる心配も無い。

だが、より長期的に見れば、深刻な不安は未だ続いているとあってよかった。

人が生きていく為には水が不可欠だが、海のど真ん中では容易に水を手に入れる方法は無い。

それに、こうして海水に浸かっているだけでも確実に体温は奪われていくし、波に揺られているだけでも体力の消耗は避け難かった。

結局、今は一時的に一息付いていても、いずれ遠からず生命の危機に晒されると言う、決して明るくは無い展望については全く変わりが無いのだ。

濁流から解放された事に浮かれていた為に、今になってふと気付いた事だが、波のうねりが徐々に高くなっている様な気がするし、頭上に視線を傾けても星一つ見えないという事は、今頃そこには厚い雲の塊が覆い尽くしていて、すぐにも大量の雨粒を吐き出さんと、タイミングを見計らっている最中なのかもしれない。

嵐が近くに迫っているのか？

そういえば、ひっきりなしに頬を打つ風が、見る見るうちに激しさを増している様な気がする。

言い知れぬ不安感がふと頭を擡げて、思わず闇に覆われた天上を仰ぎ見ると、まさにそのタイミングを待っていたとばかりに、俺の額や頬にポツポツと雨粒が落ちてきた。

程なく雨粒は大量の滝の雨となって海面に降り注ぎ、辛うじて海面から上に出ている肩より上の部分も、見る間に大量の水滴に覆いつくされた。

雨水は、喉の渇きを癒すという意味では歓迎出来るものではあったが、嵐となると話はまた別である。

嵐で波のうねりが大きくなれば、丸太にしがみ付く腕の疲労も激しさが増す上に、波の激しさに抗し切れずに丸太を手放してしまう可能性もある。

この大海原のど真ん中で、丸太を手放して無事にいられる見込みは殆ど無いだろう。

すぐに溺れて息絶えてしまうに違いない。

結局、瞬間的に一息つかせて安堵しても、一度俺に降りかかった災厄の限りない連鎖は、そう簡単に俺を解放してくれる訳ではなさそうだ。

俺の両腕は、しばらく丸太にしがみ付いていた疲労から悲鳴を上げ、痺れた様に力が入らなくなっていた。

すぐにでも手放してしまいそうな、ほんの僅かなきっかけさえあれば、丸太の方が離れていってしまいそうな感覚に度々襲われたが、『手を離したら終わりだ』という意識だけが、辛うじて俺と丸太の間を引き止めていた。

しかし反面、ほんの少し前までは、立て続けに自分の身に襲い掛かる生命の危機から逃れつつ、僅かな幸運や不幸を喜んだり嘆いたりしながらここまで流されてきたが、今やこれまでにこだわって来たものがどうでも良くなってしまっている自分も同居していた。

生き抜く事に拘るばかりに、生命の危機を必死に潜り抜けてきたが、もっと早いうちに呆気なく死んでしまった方が、むしろ遥かに楽だったのではないかな？

今からでも、いっそこのまま丸太から手を離して、一瞬にして溺れてしまった方が、死ぬ瞬間は確かに苦しいかもしれないけれども、死んだ後はずっと楽になれるのではないかな…などという、具にも付かない妄想が繰り返し浮かんで消える。

いわゆる『臨死体験』を経験したと主張する、ごく一部の特殊な人で無い限りは、人が生きながらにして死後の世界を垣間見るなど到底不可能なのだから、その先に何かがあるのかなど俺に分かる筈がない。

しかし、今のまま時間が経てば、それだけ事態が深刻化していく状況下であれば、あれ程避けたがっていた死への旅路でさえ、今よりは遥かにマシな……ひょっとすると、予想外に柔らかく温かく甘美な世界が広がっているのではないかな……と、無根拠な誘惑に駆られてしまう。

——今すぐこの手を丸太から離して、溺れてしまった方が楽なのだろうか……。

俺の徐々に薄れ行く意識の中で、危険な妄想が首を擡げていた。

最早、それが今までの自分の行動を全否定する結果になるという意識も、嵐の暴風に舞い散る紙くずの様に跡形も無く飛び散って、今この苦境から逃れられるならどうなっても良い……という投げやりな気分には陥っていた。

＊

——熱い、まるでフライパンの上で炙られている様な熱さだ。

ぼんやりとした夢見心地の意識の中で、俺は漠然と素肌を突き刺す様な熱さを感じていた。

なぜこんなに熱いんだろう……確か、嵐の海の中で荒い波に揺られ続けて、遂には力尽きて、命の支えであった筈の丸太を手放してしまったと思っていたのに……。

だとすると、ここは既に死後の世界という奴なのか？

俺は相変わらず朦朧としたままの意識を無理やり覚醒させて……というよりも、体の方

が茹だる熱さに耐えかねて、一刻も早く起き上がる事を要求したといった方が正しいだろうか。

俺は全身に、鉛の板を何重にも分厚く、固く縛りつけた様な重苦しい体を引き摺って、よろける様にヨロヨロと力なく起き上がった。

辺りは一面の砂に覆われていた。

いや、遠浅の砂浜といった方が正確かもしれない。

背後を振り返ると、つい先程までとは打って変わって、大人しくサラサラと心地好い音を立てながら定期的に干満を繰り返す、海水浴場にはまさに打ってつけといったなだらかな砂浜が広がっている。

海水の色はどこまでも青く透き通って、時折太陽の射す様な日差しを受けてキラキラ輝いている。

その上にはどこまでも雲一つ無い青空が広がっている。

そして、時折優しく頬を撫でる様に冷ややかなそよ風が流れる、南海のリゾート地といった風情の海岸であった。

しかし、そんな俺の甘えた予想が通用する筈も無く、現実はその程までに過酷かつ無慈悲なのだと改めて実感させられるまでに、大した時間は掛からなかった。

砂浜の背後に堆く盛り上がった砂山の頂上に這い上がると、開けた視界の先には、どこまでも限りなく続く一面の黄砂の大海原が広がり、なだらかな曲線を描いて上下する峰の稜線が、海の波のうねりさながらに十重二十重に折り重なって続いている。

一見、時が止まったままの様にも見える黄色い波のうねりも、注意を傾けてよく観察すれば、時折激しく吹き荒れる風に煽られて、微妙ではあったが刻一刻とその形を変えてゆく。

俺は、眼前に広がる光景を目の当たりにした瞬間、南海のリゾート地などと不覚にも思い込んだ自分の認識が明確な誤りで、海の果てと陸の果てに挟まれた境目の隔絶地帯に、生きる糧を全て奪われたまま放置されたのだと気付いて、この先に立ち塞がるだろう数々の困難を思って途方に暮れた。

海側の彼方に見えるのは、鮮やかなエメラルドブルーに透き通った水平線と、一点の曇りも染みもない快晴の青空。

陸側の彼方に見えるのは、日差しの具合によって微妙にコントラストを変えつつ、時折風に舞い上げられた砂に煙る黄色い砂の大海原だった。

そして、陸海二つの大海原に挟まれた僅かな領域には、右手の果てから左手の果てに至るまで、延々となだらかな遠浅の砂浜が続いていた。

自分の見渡せる四方のどちらを向いても、変わり栄えのしない風景がどこまでも切れ間無く繋がっていて、人の存在を示す痕跡は微塵も感じられなかった。

——一体どちらへ向かえばいいのだろうか？

当面は、人のいるいないはともかく、自分の命を繋ぐ為にも水と食料が必要だ。

水場には緑が息づく筈だし、動物も水場を求めて集まってくるに違いない。

動物や植物は、当面の飢えを凌ぐ食料として活用できるだろう。

だが、自分の命を保証する明らかな標ともなる肝心の緑は、自分を中心としたどの方向にも見分けられない。

「……またしても、どちらに進むか決めなくちゃならないのか」

俺はここに至って、まるで自分が運命の神様の振るダイスの目に弄ばれているのではないかと、そんな他愛もない馬鹿馬鹿しい考えがふと頭を掠めた。

生まれてからこれまでの人生で、終始緩慢で鈍く淀みながらゆったりと流れていた俺の時間は、ここに来て立て続けに襲いかかる様々な事態を、よりショッキングに、インパクトのあるトピックとして演出する為に、予め何者かによって仕組まれた巧妙なシナリオなのではないかと疑い始めていた。

その巧妙なトリックを仕組んだ者の正体や目的には思いも及ばないが、俺の余り頼りにならない所々途切れかけた記憶を辿る限りでは、そう判断せざるを得ない。

一体、いつ、どこで、俺の地味だが穏やかに回転していた人生の歯車は、それまで滞りなく刻み続けて来たリズムを狂わせたのだろうか？

ともあれ、いつまでもこの場に留まり続けても、焼け付く喉の渇きに耐えかねて、遠からず息絶えてしまう結末は余りに明白だ。

運命の神様だかダイス職人だかは知らないが、そんな得体の知れない者の気紛れ道楽の犠牲になって堪えるものか！

俺は再び、内なる直感の閃きが導くままに、砂浜に沿って太陽の日差しを背中で受ける方向へ向かって歩き出した。

ただ単に、直射日光が視界に入ると、少し眩し過ぎて目が疲れると言うだけの理由でしかない。

しかし、どちらの方向にも何の希望も見出せる見込みがない状況に追い込まれれば、誰だってそういったどうでもいい下らない理由を重大な選択の判断基準にしてしまう筈だ。

俺は数十メートル程歩いてから、ふと思い立って砂山から波打ち際へと降りた。

繰り返し波の満ち引きで充分平らにならされた、しかも程よく水分を吸って足場の固くなった地面は、サラサラに乾燥して足を取られる砂地よりも遥かに歩きやすい。

それに、水気を含んでひんやりとする位の方が、俺の汚れて疲れ切った素足には優しかったし楽だった。

俺は一人、しばらくの間は歩く事に集中して無心を心掛けていたが、やはりこの様な特殊な状況下に置かれれば、いつしか自分の心を惑わし、疑心暗鬼に陥れるどうしようもない考えに囚われてしまうものだ。

歩く以外に、出来る事、すべき事がなかったし、例えこのまま歩き続けても緑が見つからずに、いずれ足も動かなくなって行き倒れ、焼け付く太陽の光にジワジワと時間をかけて炙られながら、いつしか皺くちの萎びたミイラ状に醜く変形したまま息絶えてゆく……そんな、最も避けたいが可能性の高い将来の自分が頭を掠めて、辛うじて足を動かしている僅かばかりの気力の最後の欠片まで、跡形もなく打ち砕いてしまいそうだった。

——何で俺はこんな目に遭わなくちゃいけないんだ。

再び、自分が辿ってきた忌まわしき出来事の時緯に思いを馳せ、なぜ今自分が砂漠の海岸に一人置き去りにされ、なす術もなく朽ち果てるのを待ち続けなくてはならないのか、その原因となった物の正体について、延々と思いを巡らせていた。

思い返してみれば、この砂漠に打ち上げられたのは、真夜中に嵐の海に投げ出されたからだし、その間に自分自身の選択の余地は残されていなかった。

俺が主体的に何かを選択したのは、身に覚えがなかったにも拘らず、闇社会の暗殺者に突如襲撃された折に、逃げた路地のルートは俺の選択だし、その先の逃げ道が高い壁に閉ざされてしまった時に、地下道へと逃れる選択をしたのも自分自身だった。

しかし、あの時は他に逃れる術のないギリギリの選択だったし、あの時別の選択をしていても、闇社会の暗殺者に呆気なく捕らえられて、いい様に甚振られ鬦り殺されていたに違いない。

でも、それを言うなら、なぜ俺が闇社会に付け狙われる破目に陥ってしまったのだろうか。

俺はこれまで、どちらかと言えば地味で目立たない人生を送ってきた。

闇社会に関わるなど以ての外で、余計なトラブルに巻き込まれずに昨日と同じ今日一日が送れる事だけを願って、当たり障りのない日々日常を過ごしてきた、しがたい一般庶民の一人に過ぎない。

でも、そんな俺が、どこでどう道を踏み外してしまったのか。

そもそものきっかけは、バーチャル・ドラッグなる新種のPCゲームに心を奪われた為に、『バーチャル・ドラッグ対策法違反』の容疑で警察に逮捕され、更生処置なる刑罰を課されるという、余りにリアルな夢を見た事から始まった。

しかし、実はそれが単なる悪夢の類いに過ぎないと気付かされたのは、それまで何年にも渡って俺と付き合っていた儚い願望の作り出した朧な幻……バーチャル・ドラッグが作り出した俺の最愛の彼女、バーチャル・フィギュアのクローディアだった。

クローディアだけは、いつだってずっと俺の味方だと信じていたのに！

そうだ！

結局、あのトンでもないパテン師のクローディアを作り出したバーチャル・ドラッグこそが、俺をこんな人跡未踏の僻地に追いやって、人知れず二目と見れない哀れな姿のまま息絶えるのを心待ちにして止まない、俺を陥れた張本人に違いない。

ああ、そういえば、バーチャル・ドラッグに必須の精神感應センサーやエクステンションキットをネット経由で購入した事があったのだが、バーチャル・ドラッグ関連のオプション品は闇社会が主に取り仕切っているのだった。

今から振り返れば、俺が唯一関わった闇社会との関係といえばそれだけだったが、詳細な理由が何であったとしても、最早そんな些細な事実には拘る意味は殆どない。

きっと、バーチャル・ドラッグが全ての元凶だったのだ。

それがはっきりしただけで充分だった。

しかし、今更バーチャル・ドラッグに嵌ってしまった数年間の愚行を嘆いてみても、どうにも取り返しのつけようがない。

この砂漠地帯をどうにかして抜け出し、再び人々の住む場所に辿り着かない限りは、例え何を望もうと儚い砂漠の砂上の楼閣として、瞬く間に消え失せる自らの宿命を待ち続けるしかないのだから。

俺はただ、黄色い砂嵐に覆い尽くされて朦朧とした意識の中で、ただ歩き続ける事だけを僅かに念じながら、どこまでも果て無き道をトボトボと歩いていた。

それから一体どのくらいの時が流れたのだろうか。

俺は、未だに砂漠の波打ち際をあてもなく彷徨っているのだろうか。

今や、自分が何をしているのかも理解出来ない程混濁した意識の中、俺の足だけが機械的に繰り返されていた。

まるで別の生き物の様に、後から継ぎ足したサイborgのパーツの様に。

遥か遠くから、ビョウビョウと砂を巻き上げて吹き荒ぶ風に紛れて、微かに何者かの声が聞こえる様な気がした。

その声は、『処置は終了した……』と淡々と呟いた様な気がした。

＊

俺が住み慣れたこの部屋に再び戻って、既に一週間が過ぎた。

まるで、生まれてこの方、自分自身が長い夢を見ていたのではないかと思える程、何もかもが全く違って感じられる。

夢見心地のままこの部屋に戻された後、俺は一週間を殆ど何もせずにゆったりと過ごしたが、昨日今日になって『これではいけない』と感じ、インターネットの求人サイトに目を通す様になった。

この一週間の日課として、いくつかのニュースサイトを巡ってその日の事件・事故の記事を読んで回っているのだが、なぜ急に世間で起こっている出来事に興味を持ち始めたのかは良く分からない。

ただ、何となくそうしないと、例えようのない気持ち悪さが心のうちに芽生えてきて、毎日の出来事を知らずにはいられない衝動に駆られてしまう。

まあ、別に悪い事をしているのではないのだから、堂々とやればいいのだが、今までそんな事にはまるで関心が湧かなかっただけに、何となくこそばゆい感覚に襲われるのだ。

気分の赴くままに、ダラダラと今日の国内ニュースをチェックしていると、『密売組織摘発！ バーチャル・ドラッグ対策法施行後最大級』といった見出しが目に入った。

かつて世間を賑わせて、多くの社会不適應者を生み出した為に、遂に法的規制まで設けて徹底的に取り締まれたバーチャル・ドラッグだが、非合法化後最大級の密売組織を摘発したのだそうだ。

未だにバーチャル・ドラッグ禍に蝕まれた者は少なからず存在する様だが、今回の密売組織摘発でバーチャル・ドラッグ撲滅に向けて一層弾みがつくとの、当局のコメントが添えられていた。

そういえば、俺もかつてバーチャル・ドラッグなる物に惑わされた様な気もするが、あの様な怪しげな物に執着する人々の気持ちが理解出来なかった。

誰が何に興味を抱き、関心を示そうがその人の自由ではあるが、法的に問題のある物にわざわざ手を出してまで、ひと時の精神的満足を得たいという人々の、その余りに刹那的で場当たりの感覚には、思わず首を捻ってしまう。

しかし、『分からない人には何を言っても分からない』という至言もある様に、バーチャル・ドラッグがなぜ法的規制を受ける様になったか、その経緯を知って本当の危険性を肌身で実感しない限り、言っても分からない人には何を言っても意味がない。

だが、そういった未だにバーチャル・ドラッグの甘い罠の虜になっている人達にも、出来るだけ早いうちに自分のしている事の過ちに気付いて欲しいと思う。

人の一生なんて、どう逆立ちしたって急に思っても見なかった慶事が舞い込む程おめでたいものではないし、かといって、どんなにこの世の全ての不幸を背負い込んだ様な顔をしていても、実際に起きている凶事なんて実は高が知れている。

並外れた宿命を背負っている人には、長年に渡って語り継がれる物語の様な人生が、それ以外の人にはそれなりの平凡な人生が訪れる様に、世の中の仕組みは上手くバランスが取られているものだ。

そして、並外れた宿命を背負う者なんて、極めて稀にしか生まれてこないのだし、それ以外の殆ど全ての人、ある程度の範疇の中に納まる平々凡々としたその時代なりの人生を送る様になっている。

例えバーチャル・ドラッグなどという玩具のまやかしによって、一時的に自分の人生が激変した様に感じて、所詮は実体のないただの夢幻に過ぎない。

眠っている間に夢で見た出来事が、直接現実には反映される事がないのと同じ様に、バーチャル・ドラッグが見せたつかの間の夢は現実には起きている訳ではないのだ。

「……あんなものにうつつを抜かしている連中がまだいるなんて……馬鹿な奴らだ」

俺は口の中で小さく呟きつつ、次のニュース記事へのリンクを踏んでいた。

(了)

HP 【Blankfolder】

<http://blankfolder.huuryuu.com/>

<http://blankfolder.blog.shinobi.jp/>

Copyright(C) 2006-2007 【Blankfolder】 こりん , All Rights Reserved.

本ファイルの二次配布はご遠慮下さい。

本作品へのお問い合わせは上記 HP にて受け付けております。

本作品に対するご意見、ご感想は上記 Blog でもお受けしております。